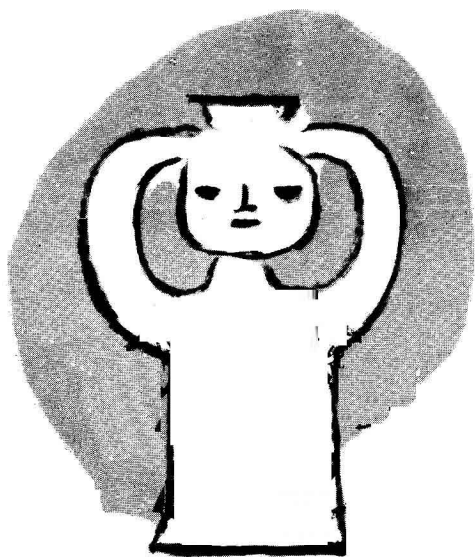


まで辺の

獅子文六



朝日新聞社

その辺まで

定価 260 円

著者 獅子文六

昭和36年 4 月20日第 1 刷発行

発行者 朝日新聞社 伴俊彦

印刷者 大日本印刷株式会社

発行所 東京・大阪
小倉・名古屋 朝日新聞社

● 獅子文六 1961年

目

次

アイマイ語

皇太子のズボン

中国のこと

芸妓論

何でも日本でできる

暗殺者の親

和服と洋服

なつかしい中国人

スタンドにて

おでん

外国帰り

夢声戦争日記

夜明かし屋

山中暦日なし

七

三

六

三

元

四

元

四

五

五

空

宅

三

七

野村洋三翁

八

新孝道

八

牛屋のネーさん

九

はちまき

一〇

憎まれ生徒

一〇

生キャベツ

二三

福田博士のこと

二六

犬の名

三八

男女共学

一四

軍神

一四〇

福沢諭吉と私

一四

思想なんてもん

一五

バナナの皮

一七

枝豆

一八

ヨコハマの女性たち

一六

好きな一隅

一七

港区の春

一八

東京をどうする

一九

花札

二〇

福島繁太郎氏を悼む

二一

石川武美氏を悼む

二二

溜息

二三

装幀・荻 太郎

その
辺
ま
で

アイマイ語

私の若い頃、夏目漱石が、朝日新聞に小説を書いていた。「門」が載った頃は、私は、まったくの少年だった。そのうち、「彼岸過迄」というのが載った。

今の日本人には、「彼岸過迄まで」と書かないと、読めないだろう。

私は、この題意が、どうしてもわからなかった。「草枕」とか、「虞美人草」とかいふ題なら、少年の私も同感するのだが、「彼岸過迄」とは、何を意味するのか。彼岸が過ぎれば、どうしたというのか。人をバカにしてるのではないか、という気持ちだった。

今となつては、あの小説の内容も、すっかり忘れてしまつたが、べつに、悪い題名だとも思わない。むしろ、漱石の小説の題のうちでは、いい方に属すると、思っている。ただ、なぜ、そんな題名をつけたか、研究の閑がない。ことによつたら、小説の掲載期間が、彼岸過ぎの予定なので、そんな題をつけたのかとも、考へている。

漱石という人は、そんなことを、やりかねない。

それでも、「彼岸過迄」というのは、漠然としてゐるようでも、まだ、限定性がある。せいぜい、三月いっぱいとか、九月いっぱいぐらいの期間までしか、通用しない。

しかし、日本人がよく使う「その辺まで」というのは、まったくひどい。

「おや、どちらへお出かけで？」

「はい、ちよいと、その辺まで……」

お互いに、よく、こんなことをいつてゐる。

その辺までとは、どの辺であるか。返事にも何にも、なっていないのだが、
相手はそれで満足して、引き下がっていく。バカな話である。

第一、自由が尊重されている時代に、人と会って、どこへ行くかと聞くのが、
まちがっている。どこへ行こうと、その人の勝手である。いちいち、報告の義務
はない。私も、よっぽど親しい相手以外に、そんな挨拶はしないことにしている。

しかし戦前、私が千駄ヶ谷に住んでる時に、一つの過ちを犯した。

私の近所に、ある知名人が住んでいて、散歩の途上、よく行き会うのである。
多少の顔見知りであるし、戦前のことで、各人の自由は、さまで重視されなかつ
たから、私は、帽子を脱いで、

「やア、どちらへお出かけです」

とやるのが常だった。

相手も、習慣に従って、ニコやかに、返事した。

「はい、ちよいと、その辺まで……」

それで、いつも別れてしまふのだが、やがて、私は、その知名人が、自宅から遠くないところに、妾宅を構えていることを知った。彼が、散歩に出かけるフリをして妾宅を訪れるという噂も、耳に入った。

妙なもので、それから、私は彼に会っても、どちらへお出かけという言葉が、口に出なくなつた。今までそれを聞いたのが、非礼と考えたのだろう。

しかし、その知名人も、ウソをついたのではなかった。

「これから、妾宅へ参ります」

というのが、街頭の紳士の挨拶でないとしたら、「その辺まで」というのは、微妙な表現となる。

日本語には、このようなアイマイな表現が、数知れずある。日本人が、これから目ざしていく生活に、そんな非論理的表現が、ハバをきかして、よいはずはない。保守派の政客などは、アイマイ表現を好むが、進歩的文化人は、論理をゴマかすとしても、論理を無視することはない。

そこへいくと、フランス人などは、古い国民であるから、保守的日本人のような傾向がないことはない。

「^{ゴマシ・クレージ}ご機嫌いかが？」

と、聞かれた時に、すごく景気がいい、というようなことも、死にたいほど人生がいやだ、というような返事もしないで「コムシ・コムサ」などと、答える。

コムシ・コムサを直訳すれば、「この如く、かの如く」であって、「まア、まア」とか、「どうやら」とかいのが、意識となる。

日本語の「まア、まア」に相当するといっても、その「まア、まア」も、アイマイ語の一つであって、わかったようで、わからないし、わからないようで、わかる。

フランス人も、古い国民だが、自由好きな根性は深く、人に立ち入られるのを好まないから、そんな表現でゴマかしてるのかも知れない。

その意味では、「ちよいと、その辺まで」というのも、まんざら捨てたもので

もなく、個人の自由を守るために、用途を存していくだろう。

〈追記〉 これを書いた後で、読者から手紙が来た。漱石の「彼岸過迄」の題意は、彼が痔を悪くして医者にかかり、癒るのは、彼岸過ぎまでかかるといわれたことに、関係があるらしいということだった。

皇太子のズボン

皇太子さんは、生活に不自由がなく、写真で拝見すると、洋服も沢山お持ちらしく、若い国民が羨ましがって、反感を起こしはしないか、と私は心配していた。

ところが、この間、ある雑誌が、皇太子さんのズボンが太過ぎるという若い日本人たちの声を、伝えていた。つまり、皇太子さんが、流行の細いズボンをはかないで、旧式のスタイルを守ってるのは、見つともないという意見で、恐らく、若い女性の間から出た声であらうか。

私は、ヤレヤレと安心した。皇太子さんに反感を持つてる者は、もっと細いズ

ボンをはいてくれなぞと、考えないだろう。皇太子さんをスマートにしたいというのも、一つの忠誠心の現われと、思った。

問題になった軽井沢のお写真というのを、念のため、私も一見してみたら、なるほど、太いズボンである。皇太子さんのお好きな英国趣味は、顕著な流行を追わないのを、特色とするが、それにしても、あのズボンは前の流行を、意地になって、お守りになってる趣さえある。現今、英国の若い貴公子は恐らく、あんなズボンはいていないだろう。

だから、皇太子さんが、若い国民の忠誠を容れて、も少し、細いズボンをおはきになるということがあっても、結構だと考えられる。

しかし、若い国民の要望が、もし、皇太子さんにマンボ・スタイルをおすすめることであつたら、これは、一考しなければならぬ。

やはり、服装というものは、その人に依らなければならぬ。沐猴もつこうにして冠す（着ている物だけがりっぱで心はサル程度の意味）という語は、逆も真である。まし